綴葉 ていよう

'24 5

No. 427

あなたが創る生協の書評誌

話題の本棚

中村達著『私が諸島である　カリブ海思想入門』

ロバート・ダーントン著、上村敏郎／八谷舞／伊豆田俊輔訳『検閲官のお仕事』

特集／博論本

新刊コーナー／新書コーナー／私の本棚

〒606-8316
京都市左京区吉田二本松町　吉田南生協会館２階
Tel:771-6211 ／ E-mail:ku-teiyo@univ.coop
綴葉HP: http://www.s-coop.net/about_seikyo/public_relations/

univ. CO-OP 京大生協 綴葉編集委員会

英語圏カリブ海思想を一望できる画期的な入門書

私が諸島である
カリブ海思想入門

中村達著
書肆侃々房

「今でも覚えている。容赦のない太陽。舗装が中途半端な道を歩く私の横を、がたがたと音をたてて通り過ぎる中古の日本車。そしてそこに残った土埃とガソリンの臭い、レゲエのリズム」――本書の著者である中村達は、大学院時代を過ごした島国、ジャマイカでの日々をこのように回想する。

カリブ海――一四九二年にコロンブスによって「発見」されると、植民地主義者による虐殺と西洋から持ち込まれた感染症により先住民族が絶滅した。西洋の思いのままに空虚な土地にされたこの島々はプランテーション植民地になり、奴隷や年季奉公人としてアフリカ人やアジア人が送り込まれた。様々な人種的背景をもつ人々は、互いに文化を衝突させながら共存してきた。

英語圏、仏語圏、スペイン語圏、オランダ語圏、植民地支配によって複数の言語圏に分割されながらも、島々は同じ海でつながり、ひとつの世界を形成する。こうしてカリブ海の人々は、自らの歴史と経験の持つ地域的特殊性のなかで独自の思想を醸成してきたという。本書は、英語圏カリブ海文学を専門とする著者が、これまで日本語でほとんど紹介されることのなかった英語圏カリブ海思想を体系的にまとめた画期的な入門書である。

「なぜハイデガーやラカンでなければならない？」――指導教員から言われたこの言葉は、無自覚のうちに西洋の哲学や理論に依拠していた著者に大きな衝撃を与えた。カリブ海の思想家たちは、この世の普遍的な叡智として受け入れられている思想や哲学、理論に、白人至上主義的、西洋中心主義的が埋め込まれていることを指摘してきた。民族と言語が一致する者を西洋が「人間」としたとき、コロンブスの「発見」以来、カリブ海は自らの言語と民族を持たない存在として西洋によって他者化されてきたという。

こうした状況を著者は『桃太郎』の話に例える。この寓話において人間たる桃太郎の正義が一方的にふるわれ、非人間的存在として扱われる鬼の口から語られることは何もない。これに対してカリブ海の思想家は筆を執り、自らの言葉で非対称な物語を語り直すことで、西洋中心的知識体系という「呪いを解く」のである。

こうしてカリブ海世界の思想を紹介する本書だが、諸手を挙げてカリブ海思想を礼賛するだけではない。後半では、西洋による他者化に抗ってきたカリブ海思想もまた、女性や非異性愛者を他者化していることを指摘する、近年のカリビアン・フェミニズムやカリビアン・クィア・スタディーズの潮流を扱っている。これらの章があることで、本書で紹介される思想の重層性が増す。

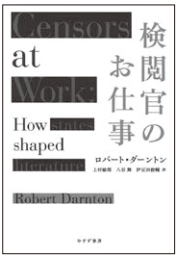
カリブ海思想は、うちにある西洋中心主義を相対化し、非西洋という周縁に生きる自らを全力で肯定する力強さがある。読者の多くは、カリブ海に特別の興味はないかもしれない。それでも本書を手に取り、思想の複数性という大海に繰り出してほしい。（**たいやき**）

（三四四頁　税込二五三〇円　12月刊）

検閲はいかにして作用するか——書物にかけられる圧力の諸相

検閲官のお仕事

ロバート・ダーントン著
上村敏郎／八谷舞／伊豆田俊輔訳
みすず書房



検閲とは何か？

本書はこの問いを論じるに当たって、ブルボン朝フランス、植民地支配下のインド、そして冷戦時代の東ドイツにおける検閲の事例を取り上げる。なぜそのように具体的な事例から考えるのかといえば、次に見るように、検閲とは普遍的なようでいて、その実態は容易く一般化して抽出できるものではないからだ。

検閲のさまざまな様態

第一部「ブルボン朝フランス」では、検閲官が現代でいう査読者のような役割を果たしている事例が紹介され、検閲のイメージはいきなり裏切られる。けれども国家にとって望ましい書物のみを認めるという点で、これもまたひとつの検閲なのだ。そんな統制の眼をすり抜けて、書物はときに非公式なルートでも流通するが、本書では地下出版を取り締まる警察の活動も検閲の一種に加えられる。

続く第二部「英領インド」では、検閲は裁判の姿を取る。ある作品が反体制的かどうかを争うこの検閲の場において、議論の様相がテクスト分析のそれに漸近するのは皮肉な事態だ。ダーントンはこの裁判を、自由主義的な帝国主義、という大英帝国の矛盾した植民地支配から目を背けるための儀式として論じる。検閲は時代ごと、国家ごとに独特の形態を取るのだ。

検閲というシステム／システムのなかの検閲

このように、本書でダーントンが描き出す検閲の姿は実にさまざまである。検閲がなぜこうも多様になるのかといえば、そもそも書物というものが、作者／読者の一対一で完結するものではないからだろう。書かれた文章が出版されるまで、そして出版された文章が読まれるまでのあいだには数多の読み手／書き手が関わっており、さらにはこの過程がもっと大きな書物の流通と影響のネットワークのなかに埋めこまれている。検閲の圧力はだから、権力者の鶴の一声で全体へとかけられるのではなく、検閲官をも含んだ読み書きの生態系のなかで、さまざまに——ときとして作者の自主的な検閲というかたちをも取りながら——作用するのである。

第三部「共産主義東ドイツ」では、この複雑さがとりわけわかりやすい。作者や編集者、読者、そして検閲官たちのさまざまな思惑が絡み合いながら、文学は形成されてゆく。ある作家は書き残している——「このシステムはひとりでに機能する。このシステムが検閲をする」。一度システムに取り込まれてしまえば、その抑圧に抗うことは難しい。

現代日本には、東ドイツのような検閲機関は存在しない。けれども書物のネットワークはWEBを通じてますます広がり、複雑さを増している。検閲の圧力はそのなかに紛れ込んではいないだろうか。もし存在するなら、どんな姿を取っているだろうか。

検閲のイメージ、ひいては読書観が刷新される一冊。（**水炊き**）

（三六八頁　税込五五〇〇円　3月刊）

ヤンキーと地元
解体屋、風俗経営者、ヤミ業者になった沖縄の若者たち
打越正行著　筑摩書房

この本に出会ってなかったらきっと今の自分はいなかった。研究なんていう不安定でハイリスクな道を選んではいなかった。今になってそう思う。人生をかけて研究をすることの覚悟を、決して忘れてはいけない信念を、それでも研究をする意味を、私に教えてくれた本がある。

本書のテーマは沖縄。本土から周辺化され、構造的な貧困を強いられてきた歴史を持つこの南洋の島々を、私たちは「楽園」かのように描き、消費する。打越はその影の部分――沖縄の若者たちが直面する貧困、日常的な暴力、故郷との複雑な距離――に光を当てる。

打越の調査は彼以外に真似できるような代物ではない。沖縄のヤンキーが経験する世界を知るために、実際に沖縄に居を移して彼らと共に生活をする、その歳月はなんと10年以上。年下のヤンキーたちの生活にパシリとして入り込み（時に叱られ）、建築の解体業者として汗を流し働き（時にどやされ）、キャバクラでは下っ端として酒を用意し（時にイジられ）、沖縄の「共同性」の過酷な一面を掘り下げていく。人が生きているのだという、極めて単純だけれど悲しいほどに伝わらないその事実を、打越の分厚い調査は圧倒的なリアリティとともに描き出すのだ。

調査とは社会を知るための重要な手段であるが、現場にとっては常に暴力である。それでもなお、と思いながら社会学者はフィールドに赴いて、語りに耳を澄ます――文字に残さなければ歴史の藻屑となる人の生があり、それを理解するための想像力はこの世界にとって大切なものだから。いつか私が研究に打ちひしがれ諦めそうになったとき、立ち返る原点はきっとこの本なのだと思う。（**浅煎り**）

（304頁　税込1980円）

特集

博論本

「博論本」――それは博士論文をもとにした本のことである。博論本にはパワーがある。将来に不安が残るなか、さまざまな重圧のもと、おのれの実存を懸けて書き上げられた本、それが博論本である。そこには著者の「すべて」がある。パワーが出ないわけがない。「あとがき」を読んでみるといい。とにかくそれは「熱い」のだ。しかしその熱さが、本への敬意を呼び起こす。自分はなぜこの研究を始めたのか、研究を進めるなかでいかなる人と出会い、いかなる教えを受けたのか、そしてそこにはいかなる苦労があったのか――。その人生譚を読むのが、私は好きだ。つまり私は、博論本が好きだ。（**ぱや**）

病いと薬のコスモロジー

長岡慶著
春風社

宗教、政治、地理、社会……様々な要素が入り混じるヒマーラヤ東部・タワン。紛争や開発、近代化などによって生じる社会状況の変化に対応しながら行う医療実践の諸相を描く。本書は、チベット伝統医療をはじめとする医療実践の日常的現場における人々のネットワークについての民俗誌である。

調査地はインド北東部、中国（チベット自治区）と国境を接しているアルナーチャル・プラデーシュ州。多くのチベット難民の窓口となるとともに、中国軍とインド軍が度々国境争いのために衝突する場所でもある。ここでの 26 ヶ月間にわたるチベット語、ヒンディー語、そしてタワン・モンパ語を駆使した調査の結果である。

明記はされていないものの、所々で研究者としての様々な苦悩が垣間見える。本調査は、言語や宗教、そして文化が入り乱れる国境で行われているため、医療一つとっても様々な実践が重なり合っている状態にある。これは近代医療と伝統医療が併存している上で、生活習慣病、精霊などに起因する病、そして環境やモノによって引き起こされる病では、それぞれ治療者や治療方法が異なることなどからも明らかである。そのため、「伝統／近代」や「自然／文化」など、既存の先行研究で用いられている単純な二項対立の構造に当てはめることのできない、包括的な枠組みの中での身体実践を分析している。これらのような予想のしにくい変化や現地の状況に対応するためにも、筆者は自身の能力の向上や視点の転換などを図って乗り越えたのである。困難に直面した際の対応は人生においても重要な観点であるように感じた。　（**プラチ**）

（416 頁　税込 4400 円）

ネオアパルトヘイト都市の空間統治
南アフリカの民間都市再開発と移民社会

宮内洋平著　明石書店

アパルトヘイトを撤廃し民主化した南アフリカで、新自由主義が都市を再編し、経済格差により人々が都市空間や公共サービスから排除される「ネオアパルトヘイト」が生じている。本書は、南ア最大の都市ヨハネスブルグにおける都市再開発を詳細に描く重厚な都市誌である。

大使館勤務を機に 10 年間南アで生活した著者は、人種差別や経済格差、治安の悪さといった社会問題に直面し、一住民として「悪いことをしているわけではないのに後ろめたい感情」を抱いた。そして南アの社会問題を読み解く指針を、著者は人文地理学の地理的不均衡発展の議論やフーコーの生権力論、ヤングの構造的不正義の概念に見出す。

本書が対象とするのはヨハネスブルグ中心部に位置するマボネン地区である。民間企業による再開発でクリエイターやアーティストが集まる一方、周辺国からの移民が多く裕福でない周辺住民は、地区から排除されている。開発側は批判を受け入れ貧困層の包摂を試みるが、それでも周辺住民はマボネンでの生活に手が届かない。それぞれが良い社会を目指してもなお不正義が再生産されるという、南アフリカ社会、そして新自由主義的統治性の持つ問題が、綿密な現地調査に基づいた記述から浮かび上がる。このような構造的不正義によるネオアパルトヘイトを解消するためには、「中心」に根本的な改革が必要であり、「救済の必要な他者」だけでなく、すべての市民に責任があると著者は強く主張する。

地に根差した人びとの視点から問題を立ち上げる本書は、アフリカ都市研究という専門領域を越えて、人文地理学、そして地域研究の先鋭な実践例を提示している。（**たいやき**）

（452 頁　税込 7480 円）

たまたま、この世界に生まれて
ミラン・クンデラと運命
須藤輝彦著　晶文社

博論本の醍醐味はあとがきにあるが、本書のあとがきにはこう書いてある――「本書は、10年以上にわたる僕のクンデラ研究の集大成である」。ひどく簡潔な一文。しかしこの一文を書くに至るまでの十数年の苦節を想うと、心にずしっとのしかかるものがある。あとがきには、本書の執筆経緯に関する次のような一節もある。「（苦しい苦しい）修士論文の執筆中に運命という主題をつかまえたとき、僕は『やった！』と思った。『これでイケる！』と」。

そう、本書は作家ミラン・クンデラのフィクション作品を読み解くことで、クンデラの文学世界における「運命」の多面的な様相とその本質を捉えようとした一冊である。『冗談』を皮切りに、『生は彼方に』『ジャックとその主人』『笑いと忘却の書』『存在の耐えられない軽さ』『不滅』『無意味の祝祭』の計七作品が各章で論じられる。ここまで多くの作品が登場すると議論にまとまりがなくなってしまいそうだが、そこはさすが博論本。本書の頁と頁のあいだには「運命」という一本の糸が通っているため、私たちはその糸を手繰りながら着実に読み進めることができる。

読後私が感じたのは、本書は「運命を軸としたクンデラ論」であると同時に「クンデラを軸とした運命論」でもあるということ。それゆえクンデラに興味がある人はもちろん、運命に興味がある人も、本書から得られるものが多くあるはずだ。そして思うに、人生には「運命の出会い」がある以上、運命とは誰しもが関わり、興味を持つものではないだろうか。たまたまこの世界に生まれ、たまたま誰かと出会う私たちは、運命に翻弄されつつ、その運命を生きてゆくのである。　（**ぱや**）

（388頁　税込3960円）

ギリシア悲劇と「美しい死」
吉武純夫著
名古屋大学出版会

私たちは時に、歴史や物語の中の死に様を美しいと感じる。例えば愛するもののために死ぬこと、信念のために死ぬこと。しかしそれは私たちにとってあまりに遠いところにある。

本書はギリシア悲劇における「カロス・タナトス」（カロス≒美しい、タナトス＝死）について、ホメロスまで遡ってこの概念が指し示しているものを明らかにしようと試みる。これが一筋縄では行かないのは、「カロス」が持つ意味の幅広さにある。この語は様々な優れた性質を表現するために使われることもあれば、適切である、といった程度の意味で用いられることもある。そこで著者は前半部で「カロス」が死と結び付けられている事例を前五世紀までの著作の中から全て取り上げ、仔細に調べる。前半部で明らかになったことを基にして、後半部では五つの悲劇作品において「カロス・タナトス」概念の果たす役割が具体的に考察される。

悲劇作品において、「カロス・タナトス」はたびたび言及されるが、登場人物たちによって志向されたこの「美しい死」が戦死以外の方法で成し遂げられることはない。例えば、悲劇『アンティゴネ』においてヒロインは「美しい死」を目指すものの、王によって生きながら地下に幽閉され、望みの叶わぬまま自殺した。著者は言う、「彼らはそれが容易に到達できるものとは考えていなかった。しかしこの言葉には、それを究めることへの彼らの憧れが凝縮されているのである」。現代よりも死が身近にあった時代に悲劇の中で表現された、カロスに死ぬことへの憧れは、観衆にとって自分自身の人生と深くかかわるものだったに違いない。　（**荒砥**）

（384頁　税込5940円）

時間にとって十全なこの世界
現在主義の哲学とその可能性
佐金武著　勁草書房

「時間」ほど身近で奇妙なものはないだろう。私達は過去や未来に思いを馳せ、変化や時の流れを感じるが、眼の前には常に「現在」しかない。過去や未来はあるのか？　あるとすれば、私達にとってなぜ現在だけが特別なのか？　変化とはなんだろうか？　本書は分析哲学の手法を用いて、こうした問いと格闘する。

本書が支持するのは、現在主義――「現在存在するものと，そのかつてのあり方，今のあり方，そしてこれからのあり方が実在のすべてだというテーゼ」だ。存在論において過去や未来の実在を認めないこの立場は、「変化」についての直観や、「現在」の特権性をうまく表現できる点に魅力がある。しかし、当然のことながら弱点も様々にあり、論敵からは鋭い批判が提出されている。

それらに対する泥臭い応答が本書の博論本らしい面白みだろう。論敵をズバズバと斬るのではなく、堅実な議論によって「引き分け」であることを示していくのである。例えば、現在主義と相対性理論は両立不可能ではないか、という批判への応答では、科学理論と形而上学の厳密な役割関係にまで議論が及び、なぜ両立不可能とまでは言えないのかを示す。

ある理論や批判は、どこまで有効でどこから効力を失うのか。その射程を精緻に見極める議論は、一般向け哲学書では省略されたり曖昧にされたりしがちだ。その点、本書は丹念に議論が展開されており、哲学の厳密性に懐疑的な読者をも唸らせる一冊だと言える。

本書、ひいてはあらゆる博論本の、熱い探求心と徹底して冷静な論述は、私達読者にこう訴えかける――学問はここで、確かに発展し続けている、と。　（**朝露**）

（207 頁　税込 4950 円）

話し手の意味の心理性と公共性
三木那由他著　勁草書房

3 月号新入生特集で紹介した同著者による『会話を哲学する』は手に取っていただけただろうか。同書は、小説やコミックの一場面を用いて、人が会話するそのときに一体何が起こっているのかを丁寧に分析していく一冊であった。抽象的な理論を日常的な例に当てはめ、皆にとって身近な「会話」という営みに新たな視座を与える。そんな著者の「会話の哲学」の土台となる博論本をここに紹介したい。

コミュニケーションを「話し手が何かを意味し、聞き手がそれを理解することで成立する営み」と捉えるとき、話し手が意味することとはなんだろう。グライス（1957）に始まるこの議論は現在進行形で取り組まれているが、「話し手の意図」にその意味の基盤を求める最初期の理論が現時点でも標準アプローチとして君臨している。そうした中で著者は、その意味基盤として「話し手と聞き手が作り上げる共同体」を新たに提案する。これは、話し手の意味の二つの本質――心理性と公共性のうち、「話し手は自分が意味したことを引き受けなければならない」とする公共性を立脚点とし、話し手と聞き手が共同で話し手の意味を形成していくとするアプローチである。

理論研究の面白さの一つは、皆が何となく感じていたことを改めてことばで規定してみせることだろう。すると、掲げた理論を起点に議論が進み、新たな知が開ける。本書でも指摘されているが、このような「直観的にもっともらしく」感じられる理論は魅力的だ。だからこそ、広く受け入れられた理論を棄却するのは難しい。況や新たな理論の提案をや。だが、本書はそれをやってみせた。一文一文、緻密に思考を、論を重ねることで。（**ひるね**）

（304 頁　税込 5280 円）

新刊コーナー

spring

恩田陸著
筑摩書房

彼は美しい。萬春（よろずはる）はバレエのダンサーで、そして振付家だ。

この物語は彼のカタチを四つの視点から描く。同年代のバレエダンサー・深津が語る一章「跳ねる」。バレエ学校のワークショップで二人は互いを発見する。将来、振付家として次々と作品を生み出す彼が初めて振り付けた相手は深津だった。同じ時代に、同じ空間に居合わせた二人は、まるでスプリングボードのように、接触し飛躍する。二章「芽吹く」は、春がバレエという言葉さえ知らなかった頃から彼を見守る叔父の稔によって語られる。彼は、バレエを知りその才が花開く前から、萬春であったのだ。いつか芽を出すその瞬間を期待せずにはいられない、彼は小さな頃から魅力あふれる人だった。三章「湧き出す」は、幼少から縁のある七瀬が語る。彼女は作曲家になっていた。七瀬は音楽を、春は踊りを、彼らが創り出すそれは、互いの芸術の源泉となる。そして四章「春になる」は、彼自身の言葉で描かれる。他者が語る彼は特別で、存在自体が芸術作品のように思われた。しかし、彼は孤高の天才でもなければ、超人でもない。彼の人間性を知るこの章で読者はさらに彼を好きになる。

「語彙が増えれば増えるほど、より繊細に、より複雑な物語を語れる」とは、春の言葉であると同時に作者・恩田陸の言葉に思える。この物語の構想から一〇年、積み重ねられたものは想像もつかない。観客である私たちはただその美しさに戦慄するのだ。（ひるね）

（四四八頁　税込一九八〇円　3月刊）

川のある街

江國香織著
朝日新聞出版

本書を構成する三つの中編は、それぞれの「川のある街」を舞台とし、そこに暮らすものたちを描く。両親が離婚し、母親の実家近くで暮らし始めた少女。結婚や出産を控えた女性たち、社会生活を営むカラスたち。伴侶に先立たれ、認知症を患った老女。歳も生活も様々だが、切り取られるのはいずれも、人生の最もドラマチックな瞬間では、ない。綴られるのは、わりあい日常的な出来事だ。しかしその短い時間の中には、彼女らが歩んできた足跡と、これから歩む道の気配が、たっぷりと詰まっているように感じられた。

本作には括弧書きが多用されている。それは例えば、「どれも青々した葉（ひとつは白と緑のまだら模様だけれど）が茂っている。」のように、思考回路や語りの寄り道を表す。また別の箇所では、「……マンションに帰ると望子は声に出して言い（家のなかに誰もいないとわかっているとき、望子はよくこんなふうにひとりごとを言う）、……」のように、その世界での前提、すなわち積み重なった人生の厚みを表しもするのだ。

読み始めた時の私には、この括弧書きが馴染まなかった。なかなかの頻度で登場するため、設定資料を読んでいるような印象でさえあった。しかし読み進めるにつれ、私はそこに登場人物の生を感じるようになっていた。

著者は過去作で、言葉にした瞬間に言いたかったこととは違う何かになってしまう思い出のありようを綴った。本作は、そんな言葉の咎をしつこいほどに解消し、人の暮らしを丹念に描いた作品だと言えるだろう。（朝露）

（二三二頁　税込一八七〇円　2月刊）

すべての見えない光
アンソニー・ドーア著
藤井光訳
ハヤカワepi文庫

第二次世界大戦下のヨーロッパ。パリで暮らしていた盲目の少女マリー＝ロールは戦火を逃れ、海辺の街サン・マロに辿り着く。博識な大叔父の家で彼女はしばしの安息を得るも、一緒に逃げてきたはずの父がある日、姿を消す。一方、ドイツの炭鉱町で育った孤児の少年ヴェルナーは工学の才能を買われ、進学を認められる。やがて第三帝国の技術兵となった彼は、レジスタンスの通信を追いかけるうち、占領下のサン・マロへ……。

時代に翻弄されるふたりの運命が交差する、その奇跡的な一瞬をめざして、小説は離れた時間と場所を――現在と過去、ドイツとフランス――振り子のように往還してゆく。そうして立ち上がってくる物語は、まるで世界全体をひとつの箱庭として模るかのようだ。細部まで磨き抜かれた精巧なジオラマのように。

作中、マリー＝ロールの父親は目の見えない娘が道に迷わないよう、地図代わりとしてサン・マロの街を丸ごと再現した模型を贈る。模型の街は人工的で、リアルな世界の質感からはほど遠い。けれどもそれは父の思いの結晶であり、いいかげんに作られたものはひとつもなく、少女を、ひいては物語をも導いてゆく。そして本書もまた、困難な時代を生きる人びとに、迷わないよう手を差し伸べるような、巨大な地図にして世界の模型なのだ。

本書は題材的にも物理的にも重厚ではあるものの、それ以前に瑞々しい冒険小説であり、ジュヴナイルである。子供が好奇心からジオラマを覗きこむような気持ちで、ページを開いてみてほしい。

（七二〇頁　税込一六二八円　11月刊）

（水炊き）

ミステリウム
エリック・マコーマック著
増田まもる訳
創元ライブラリ

「シャックシャトゥル・イク・アプラ・シャタシュ」――

スコットランドを思わせる島の炭鉱町キャリック。〈水文学者〉を自称するカークの滞在を機に、町で始まった奇怪な事件の連鎖。記念像の破壊、墓地荒らし、動物の大量死……。最後の犠牲者となったのは〈言語にまつわる奇病〉に襲われた町の住人たちだった。大人も子供もみな死んでいく。意味不明な言葉を発しながら。

奇病の原因は何か？　犯人は？　動機は？　カークはなぜキャリックにやってきたのか？　事件の調査を依頼された見習い記者マックスウェルは死の間際にいる住人たちの証言を集める。彼らの証言によって明らかになる、かつての陰惨な事件と町の暗い歴史。そして過去と現在のつながり。マックスウェルはそこから一つの〈真実〉を導き出すが……

ポストモダン文学の巨匠らしく、本作でもマコーマックは読者を惑わすことに余念がない。なめらかな因果関係を突然断ち切ったり、はたまた、物語に関係のないような長話をいきなり挿入してみたり。もはや作品全体が彼の遊び場だ。それでも読者は、次々と掘り起こされる〈事実〉と〈嘘〉を必死に追いかけ、時に振り返る。たった一つの目的、〈真実〉を知るということのために。

きっと必死な私たちを見て、キャリックの住人は笑い、言うだろう。彼ら全員がマックスウェルに放ったのと同じ言葉を――「真実を語ることができるのは、あなたがあまりよく知らないときだけよ」。

不気味さにあなたは耐えられる？

（三一八頁　税込一四三〇円　12月刊）

（はらん）

暗い青春

坂口安吾著
角川文庫

諸君は、坂口安吾の出世作「風博士」を御存知であろうか？　およそ近代文学の伝統にそぐわない荒唐無稽なこの笑劇（ファルス）が文壇に認められ、一躍新進気鋭の作家となったとき、安吾は二五歳、アテネ・フランセの友人たちと「暗い青春」の只中にいた。まさにこの日々を綴った表題作を筆頭に、本書には主に二〇歳から三〇歳を回想した自伝的作品が年代記のように収められている。

安吾の人生は、その小説に負けず劣らず奇想天外だ。幼稚園からサボりを覚えていたという彼は、中学では海岸に寝転んで過ごす問題児だった。その反面、求道に憧れて代用教員を辞し、印度哲学科入学後は一日四時間睡眠で悟りを目指すストイックさ。しかし一年半で神経衰弱になり、挫折する。治療のために梵語、パーリ語、チベット語、フランス語、ラテン語を独学で勉強したが、完治と引き換えに習った言葉はみんな忘れてしまった。アテネ・フランセ時代には一転、落伍者に憧れて突然カフェーの支配人の面接を受けたり、サーカスに入団しようとしたり。好色と称し様々な女性と関係した一方で、五年間想い合った女流作家・矢田津世子とはプラトニックな恋愛を貫き、結婚を言い出せずに破局する。

まるで茶番だ、と安吾は言う。その馬鹿馬鹿しさを冷たく見放しながら、そうせざるを得ない人生のせつなさ、悲しさに深く心を寄せる。人間の矛盾をありのまま飲み込み肯定しようとする安吾の赤裸々な筆致は、読者の忘れたい青春の思い出をも笑い飛ばしてくれることだろう。

（投稿・くたくた）

（二八八頁　税込七四八円　12月刊）

なつかしい本の話

江藤淳著
ちくま文庫

突然だが、僕はこのまえ江藤淳に会った！――というと、変な顔をされるだろうか。なぜなら彼は一九九九年に亡くなっているし、それは僕が一才の頃のことだから。

本書は、彼が幼少期から批評家として立つまでの期間を、当時に読んでいた本とともに思い出すエッセイ集だ。例えば大デュマの『モンテ・クリスト伯』（三月号の特集でも取り上げたのでぜひ一読あれ）や、批評家デビューのきっかけとなった夏目漱石など、時代も国籍も異なるさまざまな本が取り上げられているから、読んだことのある本も気になる本も、両方を見つけることができるだろう。

だが、本を口実に語られる彼の人生こそがこの本の読みどころなのだ。空襲でのちに焼けてしまう家での幼年期、鎌倉で祖父と結んだ年齢を超えた交流、戦後の殺伐とした東京での、病と戦いながらの青年期。戦争と結核とに隣り合わせで成長した彼は、生をけっして自明視しない。だからこそ彼は、読んだ本も、幼年期も、その感覚までもを定着できるのだろうか。春の宵にこの本を紐解きながら、僕は肌がどんどん鋭敏になってゆくのを感じた。空気の微かな流れや、少し開けた窓から漂う新芽の匂い。

物狂おしい、という外ない甘美な読書。

そうして、中ほどで次の一節に出会う――

「だから、本というものは、思い出をさきどりするものだと、いえるのかも知れない」。

僕は、過去と未来と現在とを混同して、思い出をさきどりして、本の中で江藤淳とともにいると思い込んだのだった。

（コーク）

（二四〇頁　税込九二四円　3月刊）

ブルターニュの歌

ル・クレジオ著
中地義和訳
作品社

記憶は脆弱で、常に歪められる。ある時は美しく、ある時は忌まわしく。

本書はノーベル文学賞作家でもある、フランス出身の小説家ル・クレジオの自伝的エッセイである。表題にもなっている第一篇では、筆者が少年期、毎年夏に訪れた父祖の地ブルターニュでの出来事が、また第二篇「子供と戦争」では大戦下に出生からの五年間を過ごしたニースでの思い出が語られる。

二つの作品に共通しているのは、過去や記憶に対する著者の向き合い方だ。第一篇ではブルターニュの美しい風景や出来事が少年期の記憶と共に語られ、読者にも一種の郷愁を感じさせる。しかし、「郷愁は名誉ある感情ではない（中略）現在こそが唯一の真実なのに、過去へと意識を向けるのだ」。都市化によって変わってしまった農村、その中でもブルトン人としての矜持を持ち生きる人々。郷愁によって現在あるものが見落とされてしまうことを著者は危惧している。

第二篇は幼年期の話ということもあり、著者はいっそう記憶の不確かさに敏感だ。「記憶というものは脆弱な組織で、容易に断裂したり感染したりする」。祖母の家で受けた爆撃の衝撃も、英雄のような存在だった少年の爆死も、本当らしく思われない。それでも確かに覚えているのは「体の真ん中に穿たれた空虚」のような飢餓、そして「顔も、名前も、物語もない恐怖」。

ブルターニュのもたらす神秘、戦争の粗暴さ。不確かな記憶の中でも決して消えない感覚がある。

（荒砥）

（二二八頁　税込二九七〇円　3月刊）

ダンテ　その生涯

アレッサンドロ・バルベーロ著
鈴木昭裕訳
亜紀書房

『神曲』作者でイタリア文学の父にして客死した政治家……。一三世紀から一四世紀、混迷のコムーネ期フィレンツェを生きたダンテ・アリギエーリとは、一体何者であったのか。

二〇二一年はダンテの没後七〇〇年の節目にあたり、改めてこの愛されかつ憎まれる詩人に脚光を当てる様々な企画が立った。二〇二〇年にイタリアで出版された原書は、そうした一連の流れの中にあって、第一線に立つ歴史学者である著者による評伝という点で特異である。訳者も言うように、ともすれば『神曲』読解のための注釈」として倒錯的に語られるダンテの人生の実態を、著者は、同時代人の記述に頼るのみならず、公証文書などの史料をもとに実証的につまびらかにしてゆく。明らかになるのは、この人物の多面的な顔である。騎士であり、恋する詩人であり、金融と不動産運用に従事する実業家であり、外交使節であり、「中間的」平民政権の政治家、そして、「他人のパン」に頼らざるを得ない亡命者。党派や利害関係の入り乱れる中世イタリアを背景に、一人の人間としてのダンテ像が浮かびあがってくる。

著者アレッサンドロ・バルベーロは、テレビやラジオ、各種講演にYouTubeなど、活動の場に制約を設けない。渉猟した史料と専門知識に裏打ちされた精細な報告を行いながらも、歴史の登場人物たちの生の声を聞き分け、その活劇を見事に再現する。本書においても、そんな彼の語り口を余すことなく堪能できることだろう。

（投稿・からまっこ）

（三〇〇頁　税込三三〇〇円　2月刊）

現代民俗学入門

島村恭則編
創元社

本書を開く前の民俗学のイメージはひどく古めかしいものだった。遠野物語をはじめとするような、各地の伝承、昔話を通じて人々のルーツを探る、そういう学問だと思っていた。しかし、実際の民俗学は思わずそんなものまで？　と言いたくなるような対象までカバーしており、予想よりずっと射程の広い学問だ。本書の言葉を借りれば、民俗学とは、「人びと（＝民）について〈俗〉の視点で研究する学問」だ。

本書で扱うテーマは多岐に渡る。敷居と境界、お代わりの作法、お年玉、火葬場における「橋渡し」、都市伝説やネットミームまで。こうした身近な〈俗〉が見開き二ページで次々と紹介される。イラストと簡潔な説明文がわかりやすく、本格的な参考文献も載っており、入門にうってつけだ。バラエティ豊かなテーマの中には興味を引くものがきっと見つかるだろう。テーマを複数見比べてみるのも面白い。例えば、お年玉やお中元、お歳暮といった儀礼の背景には、魂のつながりを意識した共通構造が見られる。こうした霊魂信仰に基づく世界観は幅広く見られるのだろうか。いつ影響力を失ったのだろうか。複数のテーマを比較して、自分なりの考えが自然と湧いてくるのも、多彩なテーマがぎゅっと詰め込まれた本書ならではの読書体験だろう。

本書を読み終えると、普段の景色が変わって見える。日常の背後に面白いものが隠れているのではないかと期待してしまう。我々の日常には、取りこぼしてしまった好奇心の種が転がっているのだ。（茂）

（一五二頁　税込一九八〇円　3月刊）

柳宗悦の視線革命
もう一つの日本近代美術史と民芸の創造

西岡文彦著　東京大学出版会

柳宗悦は「民芸」という新しい美のかたちに何を見出そうとしたのか――著者はそう問い、こう答える。「それを理解するためには［……］ロダンを思わせる白亜の石材をセザンヌのように荒削りなタッチで刻み、ゴッホあるいはマティスを思わせる奔放な筆致で絵付けして、ゴーギャンの憧れた楽園から届けられた……そんな器を、心に描いてみなくてはならない」と。この謎めいた一節を読むと、思わずこう問いたくなる。なぜ「民芸」を理解するのに、ポスト印象派以後の西洋の芸術家たちを持ち出す必要があるのかと。本書を読めばその理由はわかるはずだ。

柳宗悦と聞いてまず思い浮かぶもの、それは「民芸」だろう。しかし「民芸」という美のかたちを発見する以前にも、柳は雑誌「白樺」の同人として、目覚ましい活躍を見せていた。モダニズムの賛美者として、ロダン、セザンヌ、ゴッホ、ゴーギャン、マティスといった当時の革命的な芸術家たちを日本に紹介したほか、西田幾多郎や鈴木大拙らの禅の思想を組み込んだ美術批評を展開したり、神秘家として生きた詩人画家ウィリアム・ブレイクの浩瀚な評伝を執筆したりと、柳が日本近代美術史に残した功績は計り知れない。本書はとくにこの「民芸以前」の柳に焦点を当て、それがいかに「民芸」に結実するかを描いたものだ。「民芸の父・柳宗悦」はいかにして生まれたのか、本書はそれを解き明かす。

「柳＝民芸」という図式は、柳の思想の豊かさを覆い隠してしまう。その覆いを剥がすためにも、まずは本書を一読したい。（ぱや）

（四一六頁　税込四九五〇円　1月刊）

ブッダという男
―初期仏典を読みとく
清水俊史著　ちくま新書

一九世紀から、批判的に仏典を読み「歴史のブッダ」を復元する試み、仏教学が始まった。しかし、こうした試みは批判的であっても客観的ではなかったと著者は指摘する。

仏教学の定説では次のような解釈がある。ブッダは平和主義者であり男女平等を主張し、階級者別を否定した。これらの言説は非常にもっともらしく思える。しかし、ブッダは二五〇〇年前に生きたインド人であったという事実が疎かにされており、現代人である研究者の願望を語らせてしまった結果に過ぎない。本書は初期仏典と当時のインドの価値観を照らし合わせながらブッダ像を再構築し、さらには現代的な願望を投影することなく、バラモン教や沙門宗教との対比によって、ブッダの先駆性を歴史的文脈に位置付けている。

本書は従来の通説を批判しており、強烈な印象を受ける。しかし、人々の願望が投影されたブッダ像の重要性を重く受け止めており、著者の冷静な視座が伺える。参考文献も充実しており、仏教入門書としてこれ以上のものはないだろう。（筏）

（二二四頁　税込九六八円　12月刊）

嫉妬論
民主社会に渦巻く情念を解剖する
山本圭著　光文社新書

「嫉妬」は醜い。しかもこの厄介者はどこにでもつきまう。本書は、この人間のドロドロした感情「嫉妬」を思想史と政治史の観点から考察する。巷に溢れる自己啓発本とは異なり、社会システムを裏で動かすものとして嫉妬を見つめ直し、それを排除するのではなく、共に生きていくための道を著者は模索する。

共生は簡単ではない。例えば、嫉妬が自身とかけ離れた人間にではなく、比較可能な人間に対し生まれる感情である以上、人々を同じ地平に立たせる「平等」の理念は嫉妬とすこぶる相性が悪い。同じであることは不本意にも妬みを増大させる。この点で、「平等」を掲げる民主主義もまた嫉妬を掻き立て、その嫉妬に蝕まれる危険性がある。

「消費」「徴税」「人種差別（レイシズム）」「格差」――日常的な営みから喫緊の問題に至るまで、その背後に「嫉妬」が潜んでいることに我々は気づいていない。醜くも「最も人間らしい感情」。そんな嫉妬にある種の「愛着」を抱きながら、社会がこの感情に向き合う方策を探求する著者の熱量を感じてほしい。（はらん）

（二五六頁　税込九四六円　2月刊）

正義とは何か
森村進著
講談社現代新書

正義を論じた本は難しい……という評者の先入観を覆してくれたのが本書だ。

神島裕子による同タイトルの書（中公新書）がロールズ以降の現代政治哲学に照準するのに対し、本書の特徴はその歴史的射程の広さにある。プラトンとアリストテレスに始まり、ホッブズ、カント、ベンサムを経由してロールズまで……計九つの思想を簡潔かつ明朗に辿りゆく本書は、思想周遊記さながら。

しかし、これだけ欲張りな構成であるのに、総覧的な味気なさ物足りなさは感じられない。個人の自由を重視する筆者の一貫したスタンスと切れ味の良い解説が、二千年超の思想を一本の綺麗な糸に撚（よ）りあげ、よき導き手となっているからだろう（例えば政治的正義を論じたロールズには、かなり手厳しい批判が加えられている）。この労作を手軽に読める環境があることに感謝をしたい。

ある正義と別の正義が衝突し、多くの血が流れる現在――人類は悲劇を繰り返す。だからこそ、歴史が積み重ねてきた思想の厚みに学ぶべきことは多いはずだ。（浅煎り）

（二五六頁　税込一〇七八円　1月刊）

高野秀行が見た世界――メシ・退避勧告地域・語学――

高野秀行。辺境探検をテーマにしたノンフィクションを描く作家……なのか？　いや、作家であることに間違いはない。けれども、実際に経験しなければ書くことのできない作品を執筆する、ということは、辺境探検家なのではないだろうか。加えて、二十五を超える言語を操ることのできる、言語ヲタクとしての一面も持つ。そんな多くの顔を持つ高野氏が今まで見てきた世界を覗き見る。

◆「辺境」ってなんだ？◆

著者の紹介文や『**辺境メシ**』という作品のタイトルでも記されている辺境。この言葉を聞いて、何を思い浮かべるだろうか。広大な沙漠や自然豊かな森など、人のいない辺鄙な場所……。しかし、著者の見た光景には必ず人が存在する。つまり、辺境と言われる場所にも人が住んでいるのである。そして、人が存在するということは、その場に食文化も発達するのである。その証拠に、本書の初めに収録されている数ページにわたるカラー写真には、多くの人と食べ物が写っているおいしそうだと感じるものから「ヤバい」ものまで、日本を含めた世界各国で著者が口にした食事をとくとご堪能あれ！

また、筆者が訪れた国の一つであるソマリアも、辺境と呼ばれる地域の一つである。『**恋するソマリア**』では、ソマリランド――多くの人が居住しているが、世界中のほとんどの人がその内情や生活を知らない土地――の人々の生活が題材となっている。外務省の指標では警戒レベルが最大であるこの地域において、そこで暮らす人々はどのような文化を持ち、何に笑い、何を食べ、どのように日々を過ごしているのか。連日のジャーナリスト暗殺や戦闘地域の通過など、危険と隣合わせのエピソードももちろん多い。しかし、ソマリランドで生きる人々の生活や感性、考え方について、その当時の社会状況とともに知識として身に着け、理解することができる。所謂「辺境」に生きる人々の生活と感性に焦点を当てた、筆者の代表作の一つである。

◆これまでの旅を「言語」という観点で見た著書◆

最後に、『**語学の天才まで1億光年**』を紹介する。本書では、著者自らが今まで経験してきた旅を「語学」という観点でまとめている。それぞれの地域での「語学」にまつわるエピソードや、二五もの言語の習得方法とその動機などが、筆者が訪れた地域ごとに描かれている。これから言語を学びたいと考える人には参考にならないかもしれないような、実践に特化した話が並んでいる。加えて、マイナー言語を習得したからこそのトラブルなど、中々知る機会がない話も多く登場する。このように様々な地域の話が書かれているが、描かれているエピソードが著者のどの本に対応しているのか明記してある点は、高野秀行初心者にもおすすめしたい。

辺境を探検することへの著者のパッションが人との縁をつなぐことにより繰り広げられていくノンフィクション。高野秀行氏の見てきた世界を垣間見ることによって、読者は溢れ出てくるバイタリティを抑えることができないだろう。

（プラチ）

一〇〇年前の世界で――二人の大作家

今からちょうど一〇〇年前――日本では、関東大震災からの復興が進むころ――、二人の大作家がこの世を去った。ジョセフ・コンラッドとアナトール・フランス。耳慣れない名前だろうか？

ジョセフ・コンラッドはロシア帝政支配下のポーランドに生まれた。しかし彼は母国を飛び出してフランスで船員となり、さらにイギリスの市民権を得て、ついに英語作家にまでなった、異色の経歴の持ち主だ。彼の代表作がこの『**闇の奥**』である。

主人公兼語り手のマーロウは、ひょんなことからアフリカの奥地、そのまた奥地――闇の奥――にいる謎の人物、クルツの噂を耳にする。その噂に取り憑かれた彼は、密林を縫って流れる川を遡り、クルツと対面しようとするが……という物語が、印象主義の文体で描き出されると、文字はもう文字でなくなり、現実は現実のまま悪夢になる。二十世紀文学を変えた一冊だ。ご賞味あれ。

お次はアナトール・フランス。彼は文学の歴史において今日では忘れ去られかけている巨匠だ。彼の初めての作品集、『**ジョカストとやせ猫**』を、さらにいうならこの後者、「やせ猫」を見てみよう。舞台は世紀末の雰囲気漂うパリ。そんな花の都に、大学に入るためにハイチから一人の青年、レミがやってくる。大臣である彼の父が息子のために選んだ家庭教師兼教育係はゴデ＝ラテラス氏、（不運にも）万人が認めるところのぐうたら文士である。

さて、そんな前途不安な二人は早速、場末のカフェ「やせ猫」に入りびたる。そこに集うはにせ彫刻家、変人哲学者、いんちき詩人、ようするにゴデ氏の同類である。人生のよき師を得たといわんばかりに、レミは勉学など忘れて画を描いたり恋をしたり。つまり青春である。

しかしそんなレミとて、ただ能天気なだけのぼんぼんではない。ハイチの不安定な政情のもと暴力、歴史の暴力に晒されて幼少期を過ごした心の傷は、表立って現れずとも彼について回る。そのような悲しみを、ミラン・クンデラはエッセイ集『**邂逅**』の中で「ごくごく軽い、悲しみのヴェール」と言っている。この言葉はA・フランスの他の作品を評した一節の中の言葉だが、彼の作品を読む者は、このヴェールをいたる所に見出すだろう。

クンデラ自身、チェコの動乱を目にし、フランスへと亡命したのだから、歴史の暴力にことのほか敏感なことには間違いない。しかし彼はあくまでそれを「軽さ」、「ユーモア」によって生きることを支持する。「なかば義務的な悲壮感」の奥に潜む「真面目さの砂漠、ユーモアのない砂漠」こそが最も恐ろしい。A・フランスを歴史の闇に葬り去りたがったのもまさにこの砂漠であったという皮肉な経緯もまた、このエッセイから感得してもらえるだろう。

そして、A・フランスの再評価をもくろむこのエッセイの中頃にほんの一瞬、突然コンラッドの名前が表れる。ディレッタンティズムの末子A・フランスと、モダニズムの始祖コンラッドがどうして同じ頁の上に、と戸惑いながら本を閉じ、書名を見て僕は驚く。まさにこれこそが『邂逅』じゃないか。交流はなかったが同じ年に世を去った二人、しかし没後の運命が明暗はっきりと別れてしまった二人が、ここにこうして出会っている！　この本を手に取った偶然に感謝しながら、次なる邂逅を心待ちにして、僕は眼前の本の山から新しい一冊をそっと抜き出してまた頁を捲るのだった。（コーク）

編集後記

昨年度の1・2月号から編集委員となりました、コークです。大学に入った時は――気づけばもう随分前ですが――工学部に居たのに、紆余曲折を経て現在は大学院で文学を研究しています。日本の工業の未来を支える人材になるはずが、ここでいま、こうして編集後記を書かせていただくこととなった運命の奇妙さに首を傾げています。

よく考えると、あれもこれも、学部生の時に読んだある小説が原因なのでした。つまり、本のせいです。そんな僕の書く書評はおそらく、本、文学、に対する愛憎が激しく渦巻いているものになるでしょう（むろん、研究しているくらいですから愛の方がずいぶん多めですが）。

よって、思い込みやパッションによって偏った文章を書いてしまうこともあるかもしれませんが、そこをどうか温かい目で見守っていただければ、と思いますし、心のどこかではそういう暑苦しさを、ひそかに誇りにしている部分もあるのかもしれないな、と思ったりもします。重ね重ね、これからもどうぞ、よろしくお願いします。

さて、積ん読の山をなんとかしなくてはならないので僕はこのあたりで失礼します。ではまた、来月会いましょう。　（**コーク**）

当てよう！ 図書カード

農学部の近くに「しんしんしん」という私の好きな深夜喫茶がありますが、最近三条木屋町に姉妹店を出されました。さて、「しんしんしん」という名前は伝説のバンド、はっぴいえんどの曲名にちなんでいるそう。果たしてこの曲の作詞をしたのは誰でしょうか？

1. 大瀧詠一　2. 細野晴臣
3. 鈴木茂　4. 松本隆

（**浅煎り**）

《応募方法》 答えを書いた読者カードを、生協のひとことポストに投函してください。下記QRコードのリンク先（https://forms.gle/evEccphotDZiZURY7）から応募することも可能です。正解者の中から5名の方に図書カードを進呈いたします。応募締め切りは6月15日です。

《1・2月号の解答》 1・2月号の問題の正解は、2. の毒でした。「贈り物」であると同時に「毒」でもある“Gift”。なんだか文学的（？）な言葉ですね。でもやっぱり毒はイヤです。図書カードの当選者は、ムニエルさん、タタンさん、青でんぶさん、けんけんさん、よっしーさんの5名です。当選おめでとうございます！　（**ぱや**）

読者からひとこと

○「千円以下で買える面白本」特集的なものをしてほしいです！ ケチと思われるかもしれませんが……。　（**農学部・レヂデント**）

――「京都三大古本まつり」をすべて訪れたレヂデントさんならわかってくださると思うのですが、僕は古本屋さんの店頭にある均一台が大好きです。あそこからいい本を百円でゲットできたときの快楽はかなりのものです。本誌では基本的に古本を扱うことはできないのですが、願わくばいつか「百円以下で買える面白本」特集もやりたいです（完全に個人的な趣味ですが……）。「千円以下で買える面白本」特集もご期待ください！

○入学してから九年間、ずっとお世話になりました。講義や研究のあいまに読んでは、その度に新たな発見があったり、いやされたり……。ありがとうございました。ついに卒業です。またオンラインで読みにきます。

（**農学研究科・（＊・・＊）**）

――こちらこそ、九年間も本当にありがとうございました（現編集委員の誰よりも『綴葉』歴が長いですね……！）。これからも本誌は続いていくので、ぜひまたオンラインでもご意見をお寄せいただけると嬉しいです！（**ぱや**）